

Almy



蒼依空の受難の日々
其の二

泡蔵
AWAZO

目次

序章「赤い罾の中で」	4
第一章「仮装仲間と共に」	94
第二章「学校の日常。空の日常。」	202
第三章「あの娘は誰あれ？」	347
第四章「みんな怪しい……」	430
第五章「欲望に流されて……」	503
終章「最後の戦いその結果？」	610
おまけ 蒼依空の淫欲の日々	786
あとがき	985

序章 「昔の醫の母べい」

赤い月が夜の街にぼつかりと怪しく浮かんでいた――

そんな異常な程赤くま光る月の影響なのだろうか、
誰もいなくなった公園全体が赤く染まっている。

赤いセロハン越しに世界を見ているかのように……
世界に赤しか色がなくなってしまうたかのように

……

目にする全てが赤く染まっていた。

いや全てと言う言葉には少し語弊がある。この異様

な世界にいる登場人物二人だけが、まるで別の次元レイヤーにいるかのように赤の影響を受けていない。

マニトウフィールド——

悪魔が作り出した特殊空間——

インキュバス・サキュバスを捕らえるために用意されたバトルフィールド。

そう、赤く染まらない登場人物二人は今まさに壮絶な戦いの真っ最中だったのである。まあ、その戦いの方法とは「SEX」なのだが……

しかし、戦いはどちらかと言うと一方的であった。

現代社会の強い女性を象徴するように少し筋肉質で

引き締まった躰を持つ女は、一糸まとわぬ姿で男にま

たがり、動きを止めている男とは対照的に腰を激しく

動かしている。しかもその行為はサデイステイック

で、打ち付けるように、時には搾り取るようにねちっ

こく腰が動かされていた。そんな激しいSEXを彩る

ように、女の表情は恍惚で薄い笑みを浮かべながら、

6 序 章「赤い闇の中で」
苦しみに顔を歪める男を楽しそうに見下ろしているの

だった。

「フフフツ、気持ちいいでしょう……ハアハア……でも、まだ解放してあげませんかからね」

喘ぎ声交じりに女は更に口角を吊り上げ目を細める。

7 序 章「赤い闇の中で」
その表情、ゾクリとする程美しい。年のころは20代と思われる若い女でありながらこの妖艶さ、その笑みはサキユバスを彷彿させた。そんな心底SEXを楽しんでいるいやらしい表情を見せられたら、どんな男で

も簡単に果ててしまうことだろう。男もまた他に漏れず絶頂の淵に立たされている。だが込み上げてくる射精感とは裏腹に男は射精することができず苦しんでいた。なぜか？ それは女の手握られた青い光の糸が男根の根元に巻き付き射精を抑え込んでいるからであつた。

「ウツ……アツ……」

男の苦しそうな呻き声上がる。この状況、一体どちらがキヤツチャーなのかわからなくなってしまう。

しかも射精を抑え込んでいる意味がわからない。インキュバス・サキュバスを捕まえるには絶頂が起因となつていると言うのに……

「ハアハアハア……いいわ……いい表情だわ。ゾクゾクしちゃう……でもまだ、まだ捕まえてあげないから……私が飽きるまで我慢しなさい」

9 序 章「赤い闇の中で」
かっついていながら下腹部に力を入れ射精を促すよう腰を動かした。それはまさしく性欲に狂ったサキュバスの

行いにしか見えない。しかし、悪魔のように男の性を弄んでいる女こそ悪魔から人知れず人間界を守っているキヤツチャーに他ならなかった。

キヤツチャーは性別が転換される。と言うことはこのキヤツチャーも元は男。キヤツチャーの資質として男であればどこか女性的、女であればどこか男性的なのが定説であったが、このサデイスティックで筋肉質な軀を見ていると定説に反して元々男性的だったのではないかと思えてしまう。確かに女性でもサデイスト

は沢山いる。筋肉質な男が女性的であることも多い。一概にキヤッチャーの資質が「女性的」「男性的」だけで決まるわけではないが、その少し乱暴なSEXや蔑さげすむような瞳が男らしさを連想させたに過ぎない。

しかし、女性にチェンジしている桑畑晴登の本当の性格は真逆と言っていい程かけ離れていた。19歳になる晴登は地元でもかなりレベルの高い大学に通っている。物静かな少年時代を過ごししており孤立することも多く、休み時間なども本ばかり読んでいたので運動は

ダメだが勉強は常に五本の指に入る優秀な生徒だった。しかし、高校生の時、その暗い性格のせいでイジメと言われないまでもクラスから迫害を受けてしまった。迫害の原因になったのが、足を滑らせ階段から落ちそうになった時、思わず女の子みみたいな悲鳴を上げてしまったことで、その悲鳴も左程大きな声ではなかったのだが、運の悪いことに数名のクラスメイトに聞かれてしまい、それから背も小さく意外と整った顔立ちから「姫」と呼ばれるようになってしまったのだ。

文化祭の時も今では意外と多くなっているメイド喫茶をやれば男であるにもかかわらずメイドをやらされたりと晴登の本意ではないことを数多くやらされてきた。その日々に耐え大学生になった時、インキュバスのカーリーに見初められキャッチャーとなったのだ。いたって常識人であった晴登は真っ黒な球体に羽根の生えたカーリーの姿に尋常じゃない程パニックをおこしたが、カーリーの魔力によつてある程度魔界の情報 をすり込まれ、落ち着いた晴登はキャッチャーになる

ことを承諾した。決め手になったのはやはり女性にチェンジできることだったらしく、それまで自覚していなかったと言うか自ら避けてきた本当の感情をカーリーによって引き出されたのだった。

「アツアツ……アウツ……ハアハアハア……いいわよ。その表情……もつと苦しみなさい。もつともつと私を感じさせるのよ……ハアアアア……イイわああ……」

再び晴登の口からサデイスティックな台詞が紡ぎ出

される。物静かでネクラな青年はどこへ行つてしまつたのか？ これも抑圧された生活をしている反動なのだろうか？ もしくはキャッチャーとして多少の魔力が使えるようになった御陰で本来望むべき自分になつたのかも知れない。それにしても気弱な青年がサディステイツク淫乱女にチェンジするとは……人間の心の闇は誰しもある程度深いことを物語っている。

「晴登。いい加減捕まえて欲しいんだけど！ 何回マニトウワールド展開してると思つてるんだい？」

傍らを飛び回っていたカーリーが、いつでもインキユバスを捕らえず先延ばしにしている晴登にいい加減呆れたのか軽い抗議を入れる。

「ハアハアハア……な、なに言ってるのよ。コイツがイクからって無理矢理こっちまでイカされるなんてまっぴらだわ。私が満足するまで捕まええないわよ」

腰の動きを止めぬままカーリーを見上げ意外と冷静な口調でキツパリと申し出を断った。

「でももう一時間半もやってるんだよ」

「もうっ！ うるさいわね。もうすぐイキそうなんだから黙って見てなさいよ」

晴登は目を細め鋭い視線でカーリーを睨み付けた。まあそんなことをしたって悪魔のカーリーが人間の睨みでビビることなどないのだが、カーリーは大きな溜息を一つつくと晴登の視界から外れた。

「ハイハイ、わかりましたよ。それじゃあ早いところ頼みますよ」

これもいつものやり取りである。晴登がインキュバ

スを捕獲する時は必ず男根を縛り上げ射精を先延ばしにしていた。それもこれも男の射精に会わせ無理矢理絶頂させられるのが気に入らず、自分が満足するまで、自らの躰が自然に絶頂を迎えるまで捕まえることはしなかった。長い時は二時間を越え、短い時でも一時間以上しているのだからかなりの遅漏女である。

だが今日も既に長時間男を犯し続けているので、言葉通り絶頂までもうチョットのところまできているらしい。

「ハアハアハア……イツちやいそう……アウツ……
さあ私をイカせるのよ……私がイツたら糸を解いてあ
げる……ハアアアア……気持ちいい……イクわ……
イクわよ……」

言葉が盛り上がって行くに連れ腰の動きも速くなっ
ていく。そして乱暴に腰を深く打ち付けボルテージが
最高潮になったのに合わせ青い光の糸を解いた途端、
男根からは大量の精液が放出された。

「イクウウウウウウ！！！！！！」

男の絶頂と同時に晴登もまた絶頂を迎え、遠慮のない絶頂の叫び声が赤い世界に木霊する。男が射精で躰を震わせている中、男の躰が淡く光り出したかと思うと薄皮を剥ぐように光が秘裂の中へ吸い込まれていく。

「ギヤアアアアア！！！」

男の口から悲痛な叫び声が上がった。それは男の叫び声だったのか、囚われるのを怖れたインキュバスの断末魔だったのか……

そして全ての光が吸い取られた途端、男の意識が途切れ動かなくなった。

「……………」

男が気絶したことなどお構いなしに、晴登は今尚絶頂の快樂の中を彷徨っていた。

5秒……

7秒……

平均絶頂の7秒間を超え晴登は躰を震わせ続ける。

そして十秒を超えようとした時、振り返っていた晴登

の躰がガツクリと崩れ、動かなくなつた男の胸に手を着き躰を支えた。

「ハアハアハアハアハア……」

荒くなつた気持ちよさそうな呼吸音が赤い世界を支配していた。一時間半も動き続けていたのだそりや疲れるだろう。だが晴登の口元には心の底から嬉しそうな笑みがこぼれており、女になつた喜びを味わつていくようだった。

序章「赤い闇の中で」

「やっと終わったみたいだね」

至福の笑みを確認したカーリーは傍らに飛んでくる
と晴登にそう声をかける。しかし、晴登は虚ろな目を
カーリーに向けると怪しく唇を歪めていた。その表
情、まだ終わっていないと言っているようだ。

「はあああ……やっぱりね」

カーリーもわかっていたと言わんばかりに大きな溜
め息を付くと呆れ声で説明を開始する。

「何度も言ってるからわかってると思うけど君の躰は
あくまでも仮の籠なんだよ。早いところセルプリズン

に移さないと逃げ出す危険性だってあるん——」

「ああ〜わかってるわよそんなこと。今まで一度だつて逃がしたことないでしょ。もう少し私を楽しませて

よ……ハアアア……このインキュバスが躰の中であ
がいている感覚がたまらないのよ……アウツ……凄く
気持ちいい……SEXなんかより全然気持ちがいいん
だから……こんなに気持ちいいのにイけないなんて

序 章「赤い闇の中で」
……アウツ……射精を寸止めされているような感覚が

24
ズツと続くのよ……アアアア……狂っちゃう程気持

ちいい……」

「……ホント呆れるよ。全く晴登はサデイストなのかマゾヒストなのかわからないね」

25 序 章「赤い闇の中で」
本来子宮にインキュバスを捕獲している状態をこんなに楽しめるキャッチャーなどいないハズなのに、晴登はイクことができないうつ状態を楽しんでいた。この耐えがたい状況を楽しむなどマゾでしかない。しかし、先程までの超サデイステイックな晴登はどこへ行ってしまったのか？ 全く情緒不安定にも程がある。それ

もこれも男である時に抑圧されすぎているのが原因なのかもしれない。

「ハアアアアア……きよ、今日のインキュバスは凄く活きがいいの……アツアツ……凄いわ……凄すぎる……」

そう言いながら晴登は傍らに投げ捨ててあったコートを快楽で震える手でつかみ取った。いつもインキュバスを捜している時は全裸にコートと言う変態的な恰好だが、インキュバスを捕まえるにはSEXをしなけ

ればならないので効率的な恰好とも言える。まあ、この露出狂じみた恰好にも興奮していることは言うまでもないが。

「ハアハア……早く家に帰ってして貰わないと取り逃がしちゃいそう……」

下腹部を抱えるように押さえて襲い来る快楽に耐える。

そんな時、世界を赤く染めていたマニトウファイルドに一瞬ノイズが走った。

「????? なに今の? 見間違いかしら……ハウツ
……それよりもホント耐えられないかも……さあ、早
く帰るわよカーリー」

ノイズなど気にした様子もなくコートを身に着けて
いく。しかし、晴登は気がつかなかった。赤い世界が
海に潜ったように碧く染まっていくことに……

その変化に気がついたのは振り返った時だった。な
んと傍らに飛んでいたはずのカーリーの姿はなく地面
に転がっていたのである。

「チヨットアンタなにしてるのよ。ってカーリー大丈夫」

いつまでも起きあがってこないカーリーを拾い上げると動かないどころか丸い躰の大多数を占めるデュアルライトのような目に「停止」の二文字が表示されていた。

「カーリー！ アンタどうしたのよ？ しっかりしなさいよ」

人間界に留まるための躰とは聞いていたので、別に

両目に文字が浮かんでいることに驚いたわけではない、カーリーが機能停止しているのにマニトウワールドが展開されている……いや、別の碧いフィールドが展開されていることに驚いているのだ。しかし晴登は焦ることなく精神力で快楽を押さえ込み、冷静に辺りを見回すと10メートル程離れた場所に小柄な少女が立っているのに気が付いた。その傍らにはカーリーに似た丸い球体が両脇に着いた羽根をパタパタとはためかせて浮いている。ただその球体はカーリーとは違い

真つ黒ではなく赤みがかつた黒であつた。

「貴方達も同業者？　なにか用事でもあるのかしら？」

距離を置く二つの影に問いかける。が、晴登は全身を緊張させ警戒を強めた。カーリーを機能停止にしたのは確実に目の前にいる二人（？）が原因だろう、話合いをするつもりがないのは明らかだ。

31 序 章「赤い闇の中で」
声をかけられたのを合図に少女は一步を踏み出すとゆつくりと近づいてきた。その行動から目をそらさず

迎撃態勢を取って観察を続ける。射程内に入ったら攻撃を仕掛け先手を取るつもりで。

だがキャッチャーであろう少女の姿は少し異様であつた。まあ異様と言つても到底街中を歩く恰好ではないと言ふ意味でだが、その姿はまるでお人形さんのように可愛らしい。

外側にカールした金色の髪は碧く変わった月明かりを反射させキラキラと輝き、濃いブルーの瞳は深海を思わせる程深く、白いハイネツクニットに白いシヨ

トジャケット。パンティーが見えてしまいそうな白いミニスカートはシフォンたっぷりのパニエで膨らみ、スカートから伸びる太股は程良く肉が付き、たっぷりといやらしさを醸し出している。そして背中には白い羽根が存在を誇示するかのように広げられ、極めつけは1メートルはありそうなアンティークの鍵をまるで刀のように持っているところだろう。オタク文化の進んだ日本では、ほとんどの人が少女の姿を見て「コスプレ」と言う単語が思い浮かぶ、晴登もそれくらいのも

ことはわかったが一切興味がなかったので、なんのキャラクターのコスプレをしているのかわからない。しかもコスプレに対し偏見があるのか少女の姿を見て「うわあ〜あんな格好して恥ずかしくないのかね」と思わず口に出してしまいそうだった。一応口にしなかったのは、少女がなんの目的で現れたのか計りかねていたからである。

一切視線を離さない晴登の鋭い視線などどこ吹く風、少女は2メートルまで距離を詰めるとようやく立

ち止まった。

「お初にお目に掛かりんす。わっちはアイルと申しんす」

少女は大きな鍵を地面に突き立てるとミニスカートの裾を両手で摘まみ満面の笑みを浮かべて挨拶をした。その可愛らしさと言ったら一切女に興味のない晴登ですらドキツとしてしまう程だ。

35 序 章「赤い闇の中で」
「アイルちゃんね。はじめまして……ってのんきに挨拶をしている場合でもなさそうなんだけど。一体どう

言うことかしら私のパートナーをこんな目にあわせ
て」

パートナーと言いながら晴登は既にカーリーのことを
を地面に投げ捨て、つま先立ちになり戦闘に備えてい
る。

「そえな警戒なさらないでおくんなさいませ。まあ
キヤッチャーになった者同士ゆっくりお話と言う訳で
はございんせんが」

いでたちに合った天使のような笑みで晴登の問いに

答える。その笑顔にどこか恐ろしさを感じたのは晴登だけではないだろう。しかし、そんな挑発めいた笑みに動じることなく晴登も言い返す。

「キヤッチャーになったんだから念願通り女になっただってことでしょう。その割に貧相な躰してるじゃない。まあ小さくて女の子には見えるけどもうちよっと胸を大きくしたほうがいいんじゃないかしら。せつかく女になったんだからさ」

これが女性のシンボルと言わんばかりに大きな胸を

強調した。そんな晴登の態度をアイルはどこかおかしそうに微笑みながら見つめている。その眼差しはまるで子供を見ているようで晴登の笑みをひきつらせた。

「可愛らしい考えでらっしゃいます。確かに胸を大きくすれば安直に女性に見えんすものねえ。でもそれだけではダメなのでありますよ。女性であるシンボルがなくとも女性に見えなくてはなんの意味があると言うのでありますか」

「フン。大きいほうが男が喜ぶでしょう」

「フフフツ。なんと男性的な考えでありんすね。確かにそれも間違えではないのでありんしようが、わっちは男性など関係ないのでその考えはわかりかねんす」

お互いの視線がぶつかる。その中心ではまるで火花が散っているように思える程互いを認めない意志が感じられた。

「アイル。そろそろ始めてくれるかしら」

今まで一言も発しなかったカーリーと同じ丸い生き物が話に割って入ってきた。その声に晴登は思わずア

イルと火花を散らせていた視線を外し、アイルの横で浮かんでいる球体へ移していた。確かにその姿はカーリーと変わらない。だが、真っ黒なカーリーに対しアイルの横で浮かんでいる生物は赤みを帯びている、その上なんとも言えぬ威圧感が晴登をビビらせていた。「あら、お話などするつもりなどなかったのではありませんが、随分ゆっくり話てしまいなしたわね。それでは始めさせていただきましょう」

「フッ！」

アイルの言葉を待たず晴登は一步距離を詰めると鋭い上段蹴りを繰り出した。

不意打ち——だがその蹴りをアイルは軽くバックステップしただけで簡単に避けてしまう。そしてわざとらしく驚いた声をあげてさらに挑発した。

「もうっ、いきなりなんであります。まったく黙って攻撃してくるなんて野蛮であります」

序 章「赤い闇の中で」
41 「なにを言ってるの。なにが目的か知らないけどそのつもりで来たのでしよう」

そう言いながら晴登は続けざまに蹴りを繰り出す。

元々は運動神経も鈍い晴登だったが、チェンジするこ
とにより思い描いた動きができるようになっていた。

しかし、その止まらぬ攻撃もアイルはまるで踊ってい
るかのようにヒラリヒラリとかわしていく。

「目的でありんすか？　そうでありんすね。目的も知

らずにやられてしまうのはあまりにも可愛そうであり
んす。それでは教えて差し上げんす。ぬし様の捕らえ

たインキュバスを譲って貰おうと思ひんして」

「そう、横取りしにきたのね」

「簡単に言ってしまうとそう言うことでありんす」

「そんな可愛い笑顔で言われたからって簡単に渡すと思う？ それより魔界がどうなってるかは知らないけどそれってズルなんじゃないの？」

と言いながらも攻撃の手は緩めない。余程蹴りに自信があるのか、蹴り以外出さないところが面白い。

「そねえなのズルに決まってるじゃありませんか」

笑顔で蹴りを避けながら答える。自分で言っている

ことがわかっていているのか一切悪ぶれた様子はない。

「それなら横取りなんて考えないで自分で捕まえた方がいいんじゃないの」

「おっしやることはわかるのでありんですが、自分でと言うのがダメなのでありんす。男に抱かれると思っただけでゾツとしんす」

「エツ？」

序 章「赤い闇の中で」

44 44 ちらかと言うと性同一性障害の人間が多い。自分の性

に違和感を持ち、好きになるのは生物上の同性、そうであるなら今日の前にいるアイルが言ったことはどう言うことなのだ。

「女になってレズってわけ……」

自分の性に違和感を持ちながら、好きになるのは生物上の異性、精神的レズビアン。晴登も話には聞いたことがあったが、目の前にすると驚いてしまう。

「ちよつと待って……私をどうする気だったの。私が捕らえたインキュバスが欲しかったならセルプリズン

に移した後に出てくれば良かったでしょ！」

自分がアイルと絡んでいるところを想像してしまつたのか、晴登は自らの躰を抱き小さく震えた。確かに晴登の言い分は至極もつともである。インキュバスが目的であればキャッチャーの体内にいる時ではなく奪いやすいセルプリズンに移された後の方が断然奪いやすいはずだ。

46 序 章「赤い闇の中で」
「そねえな勿体ないことしんせん。ちゃんとわっちが抜き取って差し上げんす」

「いや、私そんな趣味ないから」

さつきまでの勢いはどこへやら、晴登はどん引きした視線をアイルに向けていた。

そんな冷たい視線を送る晴登など気にもせず、アイルは意味深にスカートに手をかけた。

「安心しておくんなんし。ちゃんとコレでぬし様を満足させて差し上げられるのでありんすから」

そう言ってスカートを捲り上げる。

「な……」

晴登はなにも履かれていない下半身を見て驚きの声を上げた。当然パンティーが履かれていないことに驚いたのではない。パニエの奥から出てきた大きな男根に驚いているのだ。

「お、男だったの……」

晴登はそそり勃つ男根を見て素直な感想を漏らす。女に興味はないのでこの方が正常であるが、晴登は自分を犯してくれるようなたのもしい男が好みなので、この中性的と言うか女の子にしか見えない男の娘を見

ても驚くだけで全然そそられるものではなかった。

「あら、女の子に見えんせんか？」

なにをとち狂っているのか、ビクビクと脈打たせている男根を晒しながらアイルは不満顔で訴える。しかし、この短いスカートはどこに20センチを越える男根が隠れていたのだろうか。

序 章「赤い闇の中で」
「なに言ってるの。貴方おかしいんじゃない。そんなモノぶら下げて女って……貴方本当にチェンジしてる

49
の？　って言うか元は男？　女？　どっちなの」

プチパニック気味に晴登が訪ねる。この状況もアイルのペースになっていることなど気付きもしない。

アイルは自らの男根を左手で握ると軽く愛撫しながら怪しい笑みを浮かべた。

「さあほんはどちらでありんしょう？ ふたなりって言うのはどちらと言えればいいのでありんしょうね？」

そう言って地面に突き刺していた大きな鍵を右手で抜くと晴登に向けて振るった。晴登がその動きに気付いた時には遅く、咄嗟に両手で庇うことしかできな

かった。

アイルの手にしているのは剣ではなく刃など一切着いていない大きな鍵、予想される打撃に備え身を構え一瞬瞳を閉じるが、襲ってくるであろう痛みがいつまで経っても襲ってこない。恐る恐る瞳を開けてみるとアイルは先程と変わらず左手で男根を愛撫し、振るってきたはずの鍵はアイルの横に突き刺さっていた。

序 章「赤い闇の中で」
——な、なにが起こったの………えっ？

訳がわからず防御を解こうとした時、やっとその異

変に気が付いた。躰が全く動かないのである。

「ぬし様の動きをロックしんした。と言つてもこのキヤラの設定を知らなければなんのことだかわからないでありんしょうけどわっちはあらゆるモノにカギをかける魔法が使えるのでありんす」

序 章「赤い闇の中で」
52
そう、アイルは地面に突き刺さっているアンテイクな鍵を使い、晴登の動きにカギをかけてしまったのである。晴登は目を瞑ってしまったのでわからなかつたが、アイルが横一線に振るつた鍵は確実に晴登の躰

を捕らえていた。だが、鍵は晴登に痛みをあたえることなく軀を通り抜け動きだけをロックしてしまったのだ。

「……………」

序 章「赤い闇の中で」
53 瞳以外動かせない晴登は声を上げることでもできずにいる。カーリーにある程度魔法が使えるようになっていると言われていたが、そもそも魔法がなんなのかわかっていない上、SF、ファンタジーの類に疎く漫画的発想もできなかつたので能力を具現化することがで

きなかつた。できたことと言えば肉体強化くらいで、アイルの凄い魔法を見て「まさかこんな凄い能力が備わっていたのか」と驚いてしまう。かといって使い方のわからない晴登にとって唯一の武器である体術を抑え込まれたらどうにもならない。

「フフフツ、いい表情になってきんした。ぬし様みたいに強そうな女性を制圧するのはたまらなく興奮いたしんす」

アイルの表情が変わった。目がうつろになりいやら

しい笑みを浮かべ、身を小刻みに震わせている。完全に悦に入ってるようだ。

そして再び鍵を右手で持つと指揮棒タクトのように振って晴登の身を動かしていく。その動き、まるで操り人形のようにぎこちない。そして最後に顔に目掛け鍵を振ると唇だけが自由に動くようになった。

「な、なんて格好させるのよ」

口が自由になった途端晴登は吠えた。その淫らかな恰好、重力を無視し空中で身が浮き、両手を背中で組ま

され脚をM字に開かされている。流石の晴登も羞恥に耐えられず頬を赤らめていた。

「当然これからたっぷりぬし様の躰を味わうのでありんすから、そねえな恰好にもなりんす。それに呻くよ
うな喘ぎ声もいいでありますけど歓喜に変わった時、
ぬし様がどねえな台詞を言ってくれるか楽しみであります
んすので口は自由にさせて頂きんした」

序 章「赤い闇の中で」
「フンツ、なに言ってるの。本気で私を満足させられる
らと思つて！」

この期に及んで晴登は強がりと言う。だが本当のところを言うと子宮に閉じ込めたインキュバスのせいでもかなり我慢できない状況になっていた。しかもアイルの大きな男根を見て小さく生唾を飲み込んでいる程だ。女同士に抵抗はあったが、アイルはどっちつかずのシーメールなのでなんとなく受け入れられるのではと思ってしまうのが敗因なのか、股間が晴登の意志に関係なく疼いてしまっている。インキュバスを横取りされるのはシヤクだが元はと言えばカーリーが早々

にやられてしまったのがいけないのだ。そしてそれ以上
に納得がいかないのは現在のこの状況である。Sっ
気の強い女バージョンの晴登なのでどうしても受け入
れがたく、負け惜しみが口から漏れてしまっていた。

「それはご安心おくんなんし。わっちは女性を喜ばせ
るのに少々自信がありんして、今まで抱いた女性は必
ず満足させておりんす」

「……それは楽しみだわ。でも大きいだけじゃ私は満
足しないわよ」

精一杯強がって笑みを浮かべてみるが、興奮してしまっているのか笑みが引きつっている。その強がる晴登を見てアイルも身を震わせ興奮を高めていた。

「それではいかせていただきんす」

どう言うわけか行儀良く一礼すると動けない晴登の太股に手を添え、左手で男根を握り尖端を秘裂に擦りつけ愛撫を開始した。

一回……二回……

舐め上げるように男根を動かす。

「……………ウツ……………ウツ……………」

尖端がクリトリスを弾く度に晴登の喉の奥から喘ぎ声が上ががるが、唇を少し噛むようにして漏れ出ないよう必死に抑え続ける。そのくぐもった喘ぎ声がかたまたままらない。感じているのが丸わかりだ。

「フフフツ……………随分と感じてらっしやるみたいでありますね」

「……………ツ、こ、これは……………貴方の……………成果じゃ……………」
「そうでありんすね。子宮にインキュバスを抱えてい

らっしやるのでありんすもの。全くわっちの成果じゃありんせん。それでは頑張って感じて頂かないといけないでありんす」

わざと晴登の言葉に同意しながらゆっくりと、本当にゆっくりと挿入していく。

「……………!!!」

唇を噛みしめ、瞼をギュッと閉じ必死になつて喘ぎ声を上げないように努力しているが、その表情が快樂の強さを物語っていた。もしこれで躰の自由が奪われ

ていなかっただら確実に躰を大きく反らし快樂の痙攣が
全身を襲っていただろう。

「あら、随分といい表情なされてんすね。まだ半分し
か入っていないと言うのに全部入れたらどうなってし
まうのでありんすか？　もしかして絶頂してしまふの
では？」

「……………」

62 アイルの問いなど聞こえていないのか晴登は答える
ことができなかった。だが、無言も答えの一つだと言

わんばかりにアイルは満足の笑みを浮かべると残り半分を一気に根元まで突き刺した。

「アウツ……アアアアアアアア……」

たまらず喘ぎ声が唇から溢れ出る。しかも一度決壊した唇はもう喘ぎを止めることはできなかつた。

「ハアハアハア……アツ……アツ……す、凄……アウツ……凄すぎる……」

うつすらと瞳を開け必死に眼球だけを動かし股間を見下ろす。ただ挿入されただけだと言うのにこのまま

絶頂を迎えてしまいそうな快樂に晴登の思考は一瞬で蕩けていた。この快樂、決してインキュバスが子宮で暴れているからではない。もしインキュバスがいなかったとしても同じ快樂を味わったことだろう。それ程、アイルの自慢する逸物は人間のモノとは一味も二味も違っていた。

「どうでありんすわっちのお味は？ とつても気持ちがいいでありんしょう」

晴登の瞳を見ればそんなことわかっていると云うの

に、アイルは意地悪にもそう質問した。

「アウト……ハアア……き、気持ちいい……凄く気持ちいい……だから早く……早く動いて……」

「あらあら、もう落ちてしまったのでありませんか？

まだ入れたただけだと言うのに……つまりありません。もう少し意地を見せていたただかないと」

序 章「赤い闇の中で」
付けるだけで全く動こうとしない。その間も晴登はさつきまでの威勢はどこへやら、動けない躰の代わり

に必死になって口を動かしいやらしい言葉を紡ぎ続けた。そんな隠語を並べる晴登に飽きたのか、傍らに飛んでいた赤みがかつた球体が不満を露わに言葉を発した。

「ねえ、サツサと終わらせちゃってくれないかしら。こうなるのは分かり切っていたことですよ。特にキヤツチャーには我慢できる快樂じゃないんだから。なんてったってアイルは特別なんですからね」

「特別」確かにアイルは他のキヤツチャーとはどこ

か違っていた。本人の考えかは知らないがインキュバスを横取りしようなどと言う考えは本来であれば魔界が作った捕獲システムを根本から揺るがしかねない。そしてなによりもその躰、胸が膨らんでいるのに大きな男根を持ち、睪丸までぶら下がっている。女性器がないので本当のふたなりとは言いがたいが、原型が男なのか女なのか解らない。この存在こそ異常なのだ。

「まあしようがないでありんすね」

自分の異常さを自覚しているのかいないのか、アイ

ルはもう一度鍵を取ると晴登の腹に突き刺した。

その光景——

これもまた異常であつた。晴登の躰には鍵穴などどこにもない。しかし、鍵はなんの抵抗もなく躰の中に入っていく。それなのに長尺の鍵は背中から突き出ることとはなく、刀身の半分程入つたところでアイルの手が止まつた。

序 章「赤い闇の中で」
「リリース」

小さな呪文と共に鍵を回す。

「アウツ……」

すると空中で固まっていた晴登の躰が突然地面に落ちるとしたたかにお尻を打ち付ける。だがそんな痛みなど気にもせず晴登は直ぐに躰を起こすとアイルにすがりついた。

「ハアハアハア……お願い……コレを入れて……入れてよ」

序 章「赤い闇の中で」
「入れてじゃないでありんしょう。お願いする時はど

69 うすればいいかくらいわかりんすね」

S っ気たっぷりに晴登のアゴを指で引き上げニツコリと微笑む。全くこの可愛らしい顔とはかなりのギャップに驚いてしまいが、きつとこのようなシチュエーションを好む人は結構いることだろう。

「お、お願いします……コレを入れて下さい」

本当にさつきまで男をいいように犯していた人物とは思えない変わりようだ。この変わりようからすると心底サデイストだったわけじゃないらしい。まあ、マツチヨな男に犯されたいと考える時点で真性のサデイス

トではないことはわかる。

「よくできんした。それじゃあ後ろを向きなさい。ぬし様みたい子は後ろからで十分でありんす」

「は……はい……」

アイルの言葉に晴登はコートを脱ぎ全裸になると四つん這いになって従順に後ろを向く。そして汚れることも気にせず大きな胸を地面に着けると挿入しやすいようにお尻を突き上げた。

序章「赤い闇の中で」

「こ、これでいいですか……お願いします。早く入れ

て下さい」

「もつと抵抗してくれた方が興奮するのでありんすが、素直な娘こも嫌いじゃないでありんすよ。それでは別な感じでイジメてあげんしょう」

序 章「赤い闇の中で」
亀頭で秘裂を愛撫しながら楽しそうな笑みを浮かべてそんな台詞を吐く、だが晴登はアイルの男根を今か今かと興奮しながら待ちわびているのか耳に届いていない様子だ。

72
何度も何度も秘裂を嬲り、たまらず晴登が挿入しよ

うとお尻を突き出せば、それをさせまいとアイルが引く。そんなことを数分続けていると焦れた晴登が情けない声を上げた。

「ハアハアハア……い、入れてくれるって言ったのに……なんで……お願いします。入れて下さい……お腹の中で暴れてるインキュバスなら差し上げます……だから……だからお願いします。早く入れて下さい……」

可愛らしい声を上げ瞳に涙を溜めながら肩越しにアイルを見上げる。クール系だった美女がこんなにも可

愛らしくねだる状況、普通の精神だったら即挿入、即射精で終わってしまっただろう。だが、S性の強い人間はこの顔を見るためにやっているのです、このくらいでは動じない。当然アイルも涼しい顔で振り返るのを待っていたかのように、視線が合った途端、一気に根元まで男根を突き刺した。

「アアアアアア！！！」

悲鳴のような喘ぎ声上がる。

両目をきつく閉じ、大きく口を開けて叫ぶ表情は快

楽が強すぎるためかどこか苦しそうに見えた。だが、その表情を見てアイルは目を大きく見開き唇を残忍に歪ませている。天使のような姿をしているくせに、その表情は悪魔のようでもどこか凶器を感じさせた。

「いいであります……それであります。その表情……素敵であります」

晴登の表情に喜んだアイルは腰を強めに押さえると叩き付けるように、膣の最深部を叩き割るように腰を振う。その強烈さは肌がぶつかる甲高い音が碧い世界

に響き渡る程だった。

パン！　パン！　パン！

「ダメエエエ……イクツ！　イクツ！　イクイクイクイクイク！」

打撃音をかき消すように晴登の叫びに近い喘ぎ声が重なる。

絶頂の叫び声――

最高の快樂――

だが晴登の躰はいつまで経っても絶頂には達せず快

楽が膨らみ続けた。

「！！！！　な、なにコレ……イクッ……もうイクのに……もうチョットでイケるのに……なんで……なんでイツてくれないのおお！！」

77 序 章「赤い闇の中で」
アイルの男根が子宮をノックする度、絶頂してしま
いそうな快楽が全身を覆い尽くしている。だが、あと
一步、男であれば後一擦り、女であれば後一突きされ
れば果ててしまう位置をキープし、薄皮一枚先に進ん
でくれない。

「フフフツ。どうですか？　気持ちがいいでしょう」

嬉しそうに笑うアイルの手にはいつのまにか鍵が握られていた。鍵は背後から晴登の躰の奥深くまで刺さっており、絶頂にロックをかけると鍵を抜き再び地面に突き刺した。

「ハアアアアア……ダメエエ……イカせて……お願いだから……イカせてください……」

78 序 章「赤い闇の中で」
晴登はなにをされたのかわからなかったが、この寸止め状態を作り出しているのはアイルであると確信で

きた。だからこそアイルに懇願したのだ。

「なにを言ってるのでありんすか？ 先程までぬし様がやっていたことと同じでありんしょう。でも最高の快樂でありんしょう。何回も繰り返しイカせるのもオツでありんすが、こうして寸止めで苦しむ姿もまた至高でありんす」

79 序 章「赤い闇の中で」
位に飽きたのか晴登を横へ寝かすと片脚を跨ぎ、片脚を抱えるようにして「松葉崩し」で攻め、そして正常

位に戻り、両足を持ち上げ正座させるようにして突き上げる「笹舟本手」ささぶねほんてへと移行する。その一連の動きはまさに手慣れており、よどみなく流れていく。その間も晴登には絶頂寸前の快樂が続いているのだからたまらない。

「ダメツ！　本当にダメエエ……壊れちゃう……ダメになっちゃう……アツアツ……インキュバスが欲しいならあげる……あげるからイカせて下さい……こんな
にされたら気が変になっちゃう……壊れちゃう……」

「ハアハアハア……アハハ……インキュバスを下さるの……でも残念ですわ。貴方に言われなくともこの状況……とつくにインキュバスはワタクシの手中にありんす」

「ハアアアア……そ、そうだけど……だからってこんな我慢できない……アウツ……もうどうなってもいい……だからお願いです。イカせてください……本当
に壊れちゃいますうう……」

そんな哀れな懇願もアイルには届かず、再び背後か

ら晴登を背中から抱く「抱えどり」へと移っていく。

一体何分こんな状態を続けているのだろう。果てる

ことのできない強い快樂の中、晴登は「もう二度と射精を我慢させるようなことはしない」と心に誓っていた。寸止めがこんなに苦しい行為だと初めて知った。

インキュバスを子宮に治め楽しんでいたことなど、これに比べたらSEX途中の快樂でしかない。この寸止め地獄……一秒でも、いや一分でも早く逃れたい。だが晴登にできることはなにもなかった。ただアイルが

満足し、一秒でも早く絶頂させてくれることを祈ることしか……

涙を流し快樂地獄を彷徨っている時、救いの糸はあらぬ方向からやってきた。

「後1分。後1分で終わらせなさい」

アイルの背後から見つめていた丸い生物が感情を込めずにそう言い放つ。

「どうして？ まだわっちは満足してんせん」

「始めから30分で片をつけなさいって言うっておいたで

しよ」

「そうでしたか？ それなら延長を申し込みんす」

「アイル！ 毎回言うけどそんなことはしないって
言ってるでしよ。言うこと聞かないと契約を切るわよ」

アイルの我が儘になど付き合ってられないと言わん
ばかりに、丸い生物はなんの起伏もなく言い放つ。こ
の言い方、力関係はハッキリしているようだ。

「もう、最後にはそれでありんすのね。わかりんした。

84 序 章「赤い闇の中で」
今日はコレくらいで我慢しておきんす」

不満げな台詞と裏腹に、アイルは目をランランと輝かせるとラストスパートと言わんばかりに腰のピッチを一気に上げた。その動きは単純なピストン運動だけではなく、腰を捻り、挿入角を変え、時にほじくるように、時に掻き回すように晴登を攻め続けた。

「ダメダメダメダメダメエエエ！！！！ 無理！　こんな無理イイ……1分も持たない……ダメダメダメエエ……」

晴登の悲鳴が続く。その声を聞いてアイルの表情が

恍惚感に満たされていく。それはまるで心地よい音楽を聴いているかのようにであった。

そして宣言通り1分が経とうとした時、アイルは傍らに突き刺さっている鍵に手をかけると再び晴登の背中へ突き刺した。

「アアアアアア！ イクウウウウ………今度は本当にイクウウウウ！！」

今度こそ絶頂に達せられることを察知したのか、晴登の声色が変わった。

「ハアハアハア……さあ！ イッておしまいなさい！」

男根を深々と差し入れたところで動きを止め鍵を回す。と同時に晴登の躰が解放された。

「イクウウウウウウ！！！！！！」

歓喜の絶叫が碧い世界に木霊する中、アイルは冷静に鍵を抜くと傍らへ突き刺し晴登を背後から抱いた。

そして一度大きく腰を振ると股間が小さく輝きインキュバスが吸い出されていく。いつもなら快樂を伴う

放出であったが、今の晴登にはそんな些細な快樂が追加されたことなど気付きもせず、インキュバスは奪われてしまふのだった。

そして絶叫は徐々に小さくなり、それに感応するかのように碧い世界が色を取り戻していく。

月明かりの薄暗い公園——

遠くから僅かに街灯の光が届いてくる。そよ風が二人の頬を撫でていくと自然の音、遠くから聞こえる街の騒音が現実に戻ってきたことを教えてくれた。

だが、散々ため込んだ快樂の風船を弾けさせた晴登の耳にはそんな音など聞こえておらず、アイルの腕の中で荒くなつた息を肩で吸いながら気絶していた。

「フフフツ……ごちそうさま。なかなか楽しかったであります。引き締まつた躰素敵であります」

意識が飛んでいる晴登を後ろから強く抱き、耳元で囁いてから頬に唇を重ねた。先程までとは違い、優しい穏やかな瞳で晴登を見つめている。その瞳には愛さえ感じられる輝きを放っていた。が、唇を離れた途端、

アイルは抱いているのに飽きたのか腕を解いてしまった。

当然意識のない晴登は重力に逆らうことなく地面に崩れ落ちる。

ドサツ！

序 章「赤い闇の中で」
ここが土の上で良かったと思える程したたかに顔を打つ晴登。だがそのくらいの衝撃で意識を取り戻すこととはなかった。

90 「おしまいでありんす。今日もしっかり横取りしんし

た」

秘裂から男根を抜きお尻を投げ捨てる。愛液を滴らせている男根は今も尚、月に向かってそそり勃たつていた。

だが、先程までと違うところが一点――

男根はインキュバスを捕まえていることを誇示しているかのよう^に緑色に光っていた。

91 序 章「赤い闇の中で」
ままの男根をスカートの内側へしま^う。一体どのよう

な構造になっているのだろう。この短いスカートに勃
起した男根が隠せるわけがないと言うのに、シフォン
たっぷりのパニエスカートの中に男根ははみ出すこと
なく収まってしまった。

「ご苦労様」

その言葉を聞きながらアイルは傍らに刺さっている
鍵を抜くと一度大きく振ってから振り返る。

「お待たせしました」

「それじゃあ帰りましょう。アイル」

「わかりんした。マモン」

なぜか最後に息の合ったキヤツチャーとプーブは、裸のまま気絶している晴登と転がっているカーリーなど気にすることなく一つ羽根を羽ばたかせ、冷たく輝く月に向かって飛び去っていくのだった。